

## 小高の名物女将が語るふるさと

双葉屋旅館女将 小林友子さん



インタビュー日時：2023年9月25日、11月7日

インタビュー場所：双葉屋旅館

聞き手：遠藤愛奈、加倉井美海、鳥谷部佳辰、宍戸滉太、前川直哉、久保田彩乃

### プロフィール

1952年12月20日、小高町（現在の南相馬市小高区）で生まれる。小高中学校、原町高校、宮城学院女子大学を卒業。1976年に結婚し夫の仕事の都合で小高を離れたが、2005年に帰郷し、双葉屋旅館を引き継ぎ4代目女将（おかみ）となる。

東日本大震災後は小高商工会女性部部長としての活動の他に、アンテナショップ「希来」（現在はKIRA）を設立するなど地域おこしの活動にも精力的に取り組む。また、福島第一原発事故をきっかけに、1986年に旧ソ連のウクライナで起こったチェルノブイリ原発事故の被災者と交流している。震災・原発事故を経験した小高の人々の思いを記録するプロジェクトを立ち上げるなど、アーカイブ活動にも力を入れている。

## 序章 友子さんが双葉屋旅女将になるまで

### ★女将になった経緯

－女将を引き継ぐことになった経緯を教えてください。

小林：親がちょうど2人同時に、けがと病気で倒れたので2005年に小高に戻って来て、ここの旅館を任せられました。2005年までは柏市（千葉県）で、市の臨時保育士を10年程やってました。無資格ですけど、教員免許はあったので。だいたいゼロ歳児、あとは週末対応っていう形でやってました。時間外もやりました。

－教員免許をお持ちなのですね。

小林：はい。中学、高校の家庭科と保健。

－学校で教えたことはありますか？

小林：ないです。仙台の宮城学院女子大学の学芸学部家政学科卒だったので、教員免許があります。

### ★ご家族について

－家族構成を教えてください。

小林：家族構成は主人と私と、息子3人。1977年生まれと1980年生まれと1989年生まれの3人です。長男は今、名古屋です。次男は流山（千葉県）。三男が今一緒に（小高に）います。あと、うちの母はここ（双葉屋旅館）の事業主で、健在なんですけど、ほとんど寝たきりで施設のほうにいます。

あとは兄。2人兄弟で、私の兄と兄嫁さん、姪っ子2人は福島市にいます。震災前（2007年）に兄たちが戻って来て、旅館の仕事を一緒にしてました。兄嫁さんも一緒に。だから、体制としてすごい楽でした。でも兄たちは避難して福島に行って、それから戻って来ないっていうのが現状です。

－2007年からはお兄さんと兄嫁さんと友子さんの3人体制で旅館を経営されていたんですね。

小林：そう。主人は東京だったんで。柏から週末だけ帰って来る感じで。

－ご結婚してすぐ柏だったのではないですよね。

小林：結婚して筑波学園（筑波研究学園都市）。建設の仕事だったので、筑波学園で3年ぐらいいたかな。次に東京に2、3年いたのかな。その後に札幌10年。それから、柏。

－それは全部、旦那さんのお仕事の？

小林：そうそう、転勤です。ゼネコンだったんで。

－その間、友子さんが働いてらしたというのは。

小林：柏が主かな。

—柏が主。じゃあ、それまではおおむね主婦として過ごされていたわけですか。

小林：どちらかというと。学校の役員とか幼稚園の役員をやってました。それで、ママ友がいっぱいできました。

—あちこちにお友達がいらっしゃるんですか。東京とか札幌とか。

小林：仙台、東京、札幌、柏にいます。柏では仕事しながら高校の広報役員をやりました。あと、小学校、中学校でもほとんど役員やってました。

—すごいですね。

小林：だって、やる人いないんだもの。

—じゃあ、手を上げられて。すごい。

小林：「はい、やります」っていうことでやってました。震災前はそんな状況でした。まさかもう1度、福島に戻って来るとは全く思ってませんでした。

## 第1章 生い立ち、震災前の暮らしについて

### ★小高町の話

—子ども時代で、小高の思い出などがあれば、教えていただきたいです。

小林：うち（双葉屋旅館）は私で4代目なんですよ。私の子ども時代は祖母が主にここの旅館を切り盛りしていました。ひいおばあちゃんもいましたけど、もうほとんど仕事はしてなくて。ここって駅前なので、仕事に来る人たちの旅館なんです。観光地じゃないので。あとは宴会とか。私が小さい時は部屋が5部屋くらいでそんなになかった。（双葉屋旅館の）敷地が（今の）半分ぐらいだったんです。仲居さんも住み込みで2人いました。

私が小学校1年か2年の頃だから、7歳。60年ぐらい前にここを改修、建て替えたんですよ。それから、今の旅館と同じようになりました。あの頃って、子どもたちも結構家の手伝いをしてたので、最初はそんなやらなかったけど、私が小学校4年生から5年生ぐらいになると、芋をむいたり、買い物に行ったり、手伝いをしてました。

父がコマツ醤油の代理店やってたんです。エリアが決まってて、浪江からあと、山中（さんちゅう。江戸時代の奥州中村藩の行政区画「山中郷」が由来）だから、葛尾まで行かないな、津島、飯館、原町のエリアが担当だったので。お店1軒1軒、商品を卸して。スーパーができる前はすごい数だった。あの頃は、本社が郡山にありましたね。みんなにちゃんと拡販して広げて、それで味噌とかお醤油の販売してました。だから、そっちのほうが旅館より（利益が）おっきかったですね。

その時って、山のほうにお醤油を売るじゃないですか。昔だから、今度（山のほうで）炭と薪を買っ

てくるんです。その燃料を（小高で）売るということをしましたね。

旅館（の主なお客さん）は問屋さんなんです。薬屋さん来てたし、呉服屋さん、ほうき屋さん、あとはメガネ屋さんも来てた。三条の金物屋さん、山梨のちょっとした宝石屋さんとか。

岐阜から、もう 80 過ぎかな、震災の直前まで来てたおじいちゃんが出て、鈍行（普通列車）で来るんですよ。ファスナーがついた腹巻きをして、そこにちゃんとお金を入れるんです。品物卸すでしょ。現金もらうでしょ。で、また、卸しに、その行き帰り。他にも昔の呉服屋さんあるでしょ。洋服を持って来るわけですよ。そういう物を卸して、それでまたお金を回収して、また卸してっていう形で、岐阜から来てた人が 2 人いたんですね。月に 3 のつく日 2 回だから、3 日の日と次の 23 日に必ず 2 泊くらいして来る人がいたんです。

### —そんなに月に何回も。

小林：来てたんですよ。だから、小高だけじゃなく、原町も浪江も回るわけです。あと、ほうき屋さんは年に一回つくばのほうから来るんですよ。震災前も 1 本 8,000 円ぐらいするほうきを必ず持ってお得意さんを回って行ってたんですよ。あと、メガネ屋さん。今は 2 万円のとかのだけど、そうじゃなくて、上野のほうの間屋さんがいて、レンズとフレームと持って、時計屋さんを兼ねてるメガネ屋さんに卸す。金物屋さんは三条から来て卸す。それを私は小さい時から見てました。あとは昔でいう反物、着物の生地を持って来る人とか、置き薬。1 年に 1 週間ぐらい泊まるんですよ。

墓石とかの石屋さん毎月来てたかな。あと、寝具とか。だから、問屋さんがうちに小さい時から泊まって、だいたい毎回同じ顔見知りのお客さんが主で、時々大きな工事とかがあったら、何日間か滞在って形で。あとは、東北電力の下請けさん。メンテナンスあるんですよ。原発もそうだし、南相馬変電所があるんです。そこに仕事に来る人が泊まったり。いろんな職種の人たちが泊まってました。

それからその後に、昭和 49 年（1974 年）ぐらいかな、（双葉屋旅館に）大広間作ったんですよ。大広間作る前もそうだけど、結婚式受けてました。昔は部屋と部屋の間がふすまなので、それを全部外して、廊下に敷畳を入れて広くして、そこで結婚式、何人かやりましたよ。その後に、大広間を作って、ここで結婚式、法事、宴会、学校の先生の忘年会、新年会を受けてました。私が小さい頃、小高には旅館が 8 軒あったんです。震災前は 4 軒。みんな大広間持ってるんで、みんな順繰りで使っていました。あと、PTA の会合とかもみんな旅館で受けてた。そんなふうに宴会が多いから、小高には魚屋さんが 6 軒以上もあったと思うんですよ。

### —6 軒。

小林：いっぱいあったと思う。そういうところのお魚を取り寄せたり、あとはお引き出物ってお返しあるじゃないですか、よく、法事とか何か。そういう時は呉服屋、金物屋があったので、タオルとか毛布、食器、鍋など主催者さんが頼んでいました。ここの周りで経済が回っていました。

あと、県立高校 2 校、小学校が 4 校、私の時代は中学校 3 校あったの。そうすると学校があるから、給食も作るじゃないですか。その時の食材ってやっぱり順番にお店が出すんですよ。そういうのでここは回ってたと思う。もちろん、教材、制服、運動靴も、地元で間に合っていました。

### —町の中でお金、経済が回ってたんですね。

小林：そうですね。

## ★友子さんの子ども時代

小林：小さい頃の思い出ね。いっぱい外で遊びました。ただいまって言うと、もうランドセル、ぼーんってやって、外に遊びに行きました。

ーどの辺にですか？

小林：だいたい私の友達って、線路の向こうにいますよ。線路の向こうに川原田っていう部落あるんですけど、あそこに友達がいて。踏切渡らなくても、線路を真っ直ぐ渡れるんですよ。

ーひゅっと。

小林：うん。自分で見て、電車通らないと、行けるんです。だいたい電車が通る時間って分かるじゃないですか。本当はダメですけどね。

ーなるほど。

小林：海まで4キロぐらいしかないの、歩いて行きました。あと、近所に友達、私と同年はいなくて、1つ下の年齢の子がいてその子と一緒に遊んだりはしてたかな。

ーお祭りなどの思い出はありますか？

小林：お祭りは、野馬追（相馬野馬追：福島県相馬地方で3日間にわたって行われる大規模な祭典）がありますが、私は遊べないんです。手伝いがあつて見たことなかったんです。

ー旅館のほうの？

小林：そう。私の小さい頃は、やっぱり団体さんを受け入れてるんですよ。戦後だったから神社ごとに申し込みをしてもらって来てた。もう部屋がないんですよ。私の記憶では、一度台所で寝た記憶がある。

ーじゃ、もう自分たちの部屋まで客用として出して。

小林：そう。あと、お祭りは、8月の盆踊り。小高では盆踊りは仮装をするんですよ。だから、双葉食堂（小高区のラーメン店。2022年9月に閉店）の亡くなったおばあちゃんなんて、体格が良かったから相撲取りの仮装をしたと思います。

ーハロウィーンの前駆けみたいですね。それは友子さんが子どもの頃の話ですか？

小林：はい、そうです。あと、次に大きかったのは小高農業高校の文化祭。昔、小高商業高校（2017年に小高工業高校と統合し「小高産業技術高校」となる）の前が小高農業高校だったんです。文化祭っていうので、苗木とか、あと、模擬店じゃないけど、うどんとかおそばとかを出してくれて。それが1番のお祭りだったかな。

ー楽しそう。

小林：はい、楽しかったです。

## ★学校での思い出

小林：学校の思い出として、中学校の頃って、私たちの時代は意外と生徒会ってきっちりあって、生徒会で決めたことをきちっとやるんですよ。あの時、自分たちが決めたのが、坊主にするか坊主にしないかっていうのと、女子が夏服にベストが欲しいってこと。いろんなことを自主的にやる生徒会っていう存在が大きくて。

週番って行って、生徒会のメンバーがお掃除の時に回るんですよ。それで、ここ、汚れてるよとか、あと、どっちがきれいになるかって行って、ぬか袋を作って、膝当てして、みんなでこうやって磨いたり。昔は木造なので、そういうことをやってましたよね。

ー友子さんが中学生の時は1967年で、1970年までが高校だから、ちょうど学生運動が盛んだった頃と同時期ですね。

小林：そうですね。60年安保はあんまり覚えてないですけど、70年安保はよく覚えてます。

ー原高（原町高校）の方は何かありました？

小林：あまり、原高の思い出はないかな。勉強も部活もしてなかったから。

ー小高中（小高中学校）のほうがむしろ生徒会とかは盛んだった？

小林：放課後、よく男子とサッカーやっていたりしてたから。そういう思い出はいっぱいある。それから、私たちの時代、自分たちの教材を買うのに、ベルマーク集めたり。あと、自分たち、イナゴ取りやったんですよ。1人2日ぐらいかけて1日1キロ以上とるんです。

ーイナゴ1キロ！

小林：大変なんですよ。だんだん取れなくなって。

ーそりゃそうですね、みんな取っていきますから。

小林：農薬も使い出したのもあると思う。でも取れないからって、石を入れるとアウトなんですよ。学校の校庭で、おっきな鍋で茹でるんですよ。なんせ1人、ノルマがイナゴ1キロですから大変なんですよ。イナゴのいる場所は、海のほうにいる人は分かってるけど、町の中のメンバーはどこに行けばいいかわからない。だから前日にある程度取ってるとか。

ーなるほど。

小林：あとは、親とかおばあちゃんが手伝ってくれるとか、そういう時代でした。

ーそれは小高中で？

小林：小高中で。私の中2、中3ぐらいまでかな。それでだんだん取れなくなるから、もうやめて、お金にしましようってなりました。すごい楽しみだったんです。取れなくても、授業やらなくていいので。

—茹でたイナゴはどうするんですか。

小林：町の人とか、そういうのが欲しい人に売って活動費にあてていたと思います。そういう時代でした。だから意外と、校長先生、わりと子どもたちの自主性に任せてくれたかな。生徒会でみんなが決めたことをちゃんと守っていれば、駄目ってことはなかったですね。

—なるほど。

小林：だから、あの頃は意外と面白かったですよね。高校では、何にも。勉強もしなければ部活もしないし、高校の思い出は無いんです。

—あんまり原高の思い出はない。

小林：電車で乗って行った思い出しかなくて。

—でも、やっぱ進学校だから、何か勉強は。

小林：いや、しない。あんまりできるほうじゃなかったんで。

—いやいや。小高からは、中学校から原高にどのくらい行きました？

小林：原高は二十数人ぐらいだと思う。商業科もあったので。あと、双高（双葉高校）に。だいたい進学。

—そうか、双高も行きますね。

小林：私は双高に行きたかったです。

—そうなんですか。なぜ？

小林：双高は完璧な男女共学。原高は別学（男女別学級のいわゆる男女併学のこと。現在、原町高校は共学）だから。男女でクラス違うんです。つまらないでしょ。何か変な雰囲気です。

—校舎の中、同じフロアの中で男女のクラスが別になっている？

小林：クラス別なんです。男子が3クラスかな。それで、女子もそうだけど、国立と私立と、そういうふうに分かれて。商業科も2クラスありました。

—男子のクラスに遊びに行くとかは？

小林：いや、今までクラス一緒だったのが分けられるから、変な意識があって、逆に。

—行きづらくなっちゃう。

小林：急に分けられて。

—なるほど。

小林：そんな高校時代。

## ★原子力発電について

—震災の時に、東京電力とか原発に注目が集まる機会とか増えたと思うんですが、それ以前は東京電力とか原発に対してどのようにお考えになっていましたか。

小林：私自身、30年ここにいないんですよ。私が小学校の頃に福島第1原発ができて。中学ぐらいの時は、どっちかっていうと浪江と小高にできる原発の方がここでの話題は大きかったです（浪江・小高原子力発電所。1968年に東北電力による建設計画が決定されていたが、東日本大震災・東京電力の福島第一原子力発電所事故にともない、2013年に建設計画の取り止めが発表された）。

うちにもそのために測定する人が泊まったりとかしてたんですよ。うちの母や、あの頃みんな、たぶんこの辺りの人たちはみんな、そういうふうにしてたけど、原発ができれば出稼ぎもなくなり豊かになるよってというのは、みんな刷り込まれてた話なのね。

でも、私の小学校の6年の担任の先生が「原発危ねえぞ」って言ったこと覚えてるんですよ。だから、やっぱりそうだったんだっていうのが。小高（浪江・小高原発）が震災のころに着工の予定でしたよね。

—そうですね。

小林：浪江・小高原発がもう着工するっていう話を聞いた時に、あ、造るんだって。そんな時はそんな危ないとか危なくないっていうよりも、できるのかな、やっとならできるんだね、という思いでした。そのあと、震災が起きて。あれ、バチが当たったかなって、すごい思ったの。造っちゃいけないっていう神様の声だったのかなっていうのは、あの頃思って。やっぱり人は自然には勝てないよねって。あとは人が押さえ切れないものはやっぱり無理なんだよねっていうのは、あの頃思いましたね。

## 第2章 震災、避難生活について

★2011.03.11 ～ 2011.03.15

—2011年の3月11日当日はどちらにおられましたか。

小林：ここ（小高）にいました。ちょうどその時、主人が1月いっぱい仕事を辞めて、柏からこっちでもう暮らすっていうことで来てました。1回も柏の友達とかにちゃんとあいさつしてないから、その日、あいさつしようって言った日が3.11だった。それも3時に出ようって言ってた。

—3時。じゃ、旦那さんもこっちいて、2人で常磐線乗って。

小林：ううん。車で。

—車で。柏に行こうと言っていて。

小林：そう。それで、お土産もちちゃんと持って、あと、友達が泊めてくれるから、着替えを持って、それで行く準備して、お金も下ろしてた。それで3時に出ようって言ってたら、2時46分に地震だった。

ガソリンがなくて、浪江のいつも入れる場所で入れようって言ってました。兄たちもいたし、留守番お願いして行こうねっていう話をしてた時に、地震がきたんです。あの日は、ここって電気切れちゃったんですよ。津波で海沿いの電線が切れちゃったのか。

#### ー送電線か何かですかね。

小林：電気切れちゃったんですよ。だから、テレビも見れないし、唯一の情報はずラジオ。でも、防災無線がちよっとだけ聞こえたんですよ。電池がまだあったのかな。それで、その時に炊き出しじゃないけど、「おにぎりを握る方、お願いします」って（防災無線で）言っていて、私手伝いに行ったんですけど。でも、早々とおにぎり握るの、終わっちゃったんですよ。

#### ーどこででしたか？

小林：小高区役所。

それで、みんな米や野菜を持って来るんだけど、あの時、私怒りながら帰って来たんです。何でかっていうと、津波があって、がっちりした人が、おにぎりくださいって来たのよ。よっぽどですよ。けどあげられないですって（担当の人が）言うのよ。でも、「握ればあるじゃん」と思って、脇のバットの中をのぞいたら三角にしたおにぎりが入ってたんです。これあげればいいじゃないと思いました。でも、「ああ、駄目、駄目」って言われたんですよ。

あとはこんなおっきなザルに、農家さんが持って来てくれたブロッコリーの塩ゆでがあったんですよ。でも、みんなに分けれないから、やれないって言うんですよ。

#### ー全員に行き渡る数がない。

小林：数がないって。やっぱりそういうことなんですよ。だから、そんなことを聞いて、明日またおにぎりやりますって言うから、プリプリ怒って帰って来たんですけど。

主人は津波が引いた後の12日に、6号線の方に向かったら、やっぱりあちこちで人がいたらしくて、そのけが人を小高病院のほうに連れてったりしてたって言ってました。流されて来た船があったりして通れなかったと言いながら。私たちはここの旅館もいろんなものが壊れたり、倒れたりしてたり、裏玄関から水が上がったので、あわてて荷物を二階まで上げたり、片付けをしました。

あとは仕事で長期泊まっていた人たちが慌てて帰っていったんですね。岩手、青森、秋田、宮城の人たちが泊まっていたんで、その人たちが戻って来て、おっきな車置いて、小さい車で行くって言うから、その人たちにおにぎりを握って渡したりして。だから、宿泊者はその時はもういなかったです。

#### ー宿泊者はいなかった。

小林：はい。みんな急いで帰って行きました。

#### ーではその時、ここいたのは友子さんと旦那さんと。

小林：兄夫婦と、母。あと、パートさんの家が浪江にあったんですけど、地震でもうめちゃくちゃになっ

てて。だから、「じゃ、うちで泊まれば」って言って、泊めました。

暖房はこたつの炭があったんですよ。昔から囲炉裏があるので。そこで暖は取れたし、あと、石油ストーブも電源じゃなく、昔のストーブだったんで、寒さは大丈夫でした。

—その段階では。

小林：はい。あと、水が電源のモーターが止まったので出なかったです。うちは井戸水だったんですけど、近所も同じで、やっぱり井戸水の人が多いんです。1つ目の信号からは電源が来てたので、親戚に水ももらいに行って、お米は炊けました。ガスは大丈夫だったんです。だから食べる物はそんなに大変な思いはしなかったかな。

—長男さんは、その時名古屋ですよ。次男さんは？

小林：次男は流山（千葉県）。

—三男さんは。

小林：三男は郡山（福島県）の大学。

—すぐ連絡ってつきました？

小林：息子たちは探したみたい。携帯がつながらないので。

—ですよ。

小林：連絡も全然取れないし、電源ないから、取りあえず安否確認も兼ねて行こうっていうことで、14日に原町の避難所に行ったんですよ。避難所に行って初めて電話が使えました。ちょうど11時に避難所に行ったときに、3号機が爆発して、屋内退避ってすごく緊迫した放送が流れて、「えっ、駄目じゃん」って思いました。どうなるかはその時分かんなかったけど、取りあえず自分たちはどこに行くかってなった時に、息子が迎えに来るよって言うから、来なくていいと伝えました。あなたたち若い人は絶対来なくてくれと。自分たちはなんとかできるし、自分たちの年であれば、命っていうのに対してのそういう思いはなかったから、いずれは行くから来ないでってあの頃言いました。

原町にいる、いとこのところに連絡が取れて、おいでって言われたんで、そこに14日は泊めてもらいました。そいで、15日、テレビ見てたらこれは避難しないと駄目だなんていうことで、15日に福島のもう1人のいとこのところへ、いとこ夫婦と一緒に避難しました。

兄たちはもう12日に避難したんですよ。何でかっていったら、兄は透析なんですよ。それで、浪江の西病院だったんです。でも、その病院も駄目なので、原町の市役所に電話を掛けたら、「カルテ持って来て」って言われたんですよ。

—カルテですか。

小林：カルテがないと透析できないって言われて、こりゃ駄目だねって言って、じゃ、もう福島に行くしかないよねって。兄嫁さんの実家も福島市だったので、福島市に行くことにしたの。でも、病院に行くにしても、線量測んなきゃ入れてもらえないんですよ。それでみんな結構大変な思いしたんですよ。やっ

ば測らないと入れてくれないって言って、そういう話は聞きましたね。寒い時なのに、子どもも震えながら。

—そうですね。

小林：うん、線量測ってもらえないと入れない。順番も遅い、何人もいるから、あの時は大変だったみたいですよ。

—友子さんは、3月11、12、13日はずっとここにいらしたのですか。

小林：はい。

—だんだん原発が危険だとか、そういう話になったりは。

小林：うん。そうなんですけど、でも、人生あとちょっとだなんていう思いがあるから、あんまり焦んなかった。

—慌てず、そんなに。

小林：自分の年齢考えて。そういうのがあるかもしれない。

—でも、周りの人がどんどんいなくなっていきましたか。

小林：そう、いなかったですよ。1軒だけいたのは、やっぱり犬がいた人。うちも犬いたんですよ。だから、それもあって、すぐは避難できなくて。大きい犬は車に乗っけれないじゃないですか、ガソリンもないしと思って。じゃ、ちょっと家族に連絡したいと思って、その日犬を置いて原町の避難所に出て行っちゃったから、もう戻れないんですよ。その時、3号機の爆発があった。ええっ？と思いながら。それで、ダル（犬）は絶対逃げるからそのうち連れに来ればいよなと思って。ずっと気になっていました。その後レスキューに助けていただき、1か月後引き取りに行きました。

だから、次の15日の日は福島に向かいました。朝早かったんですよ。8時過ぎかな。その時に八木沢峠（南相馬市原町区と相馬郡飯舘村の間にある峠）を福島方面からものすごい数の自衛隊車両とバスがすれ違ったんですよ。これ、南相馬、封鎖じゃんと思っちゃって。

—そんな雰囲気でしたか。

小林：そんな雰囲気でした。何十台も通り過ぎて行くんですよ、南相馬に向かって。私たちは、いとこの車に乗ってもらって福島に行ったので、そんなにいっぱい荷物持って行けないから、着の身着のまま手荷物を積んでもらって行ったんですよ。そして福島に行ったら、また大変で、あの頃水が駄目だったんですよ。いとこのとこ水が出なくて。

## ★2011. 03. 16 ～ 2012. 01. 30 名古屋へ避難

小林：16日に、飛行機が飛び始めていたので、じゃ、（長男のいる）名古屋に行こうっていうことになったんですよ。空港まで行くのに、福島から高速バスで、取りあえず郡山に行ったんですよ。でも駅、何にも

書いてないし、誰もいないんです。どうやって行こうかって思ったら、ちょうど目の前で外国人さん2人がタクシーに乗って、那須塩原に行くっていうんです。何でかなって思ったら、那須塩原から新幹線が動き出していたんですよ。じゃ、それに乗ろうって行って、自分たち、お金ちょっと持ってたんで、(別のタクシーに)乗っけてもらって、那須塩原から名古屋に行きました。

—郡山の大学に通っていた三男さんは？

小林：三男は後から呼びました、連絡は取れたので。もう取りあえず家の中にじっとしてるっていう。本人はやっぱり驚きと心配があったみたいです。

—名古屋に行ったのは？

小林：私と旦那と三男。もうすぐおいでって。

—お母さんは？

小林：母は兄たちと福島に。

—名古屋は3月に行かれて、いつまでですか？

小林：3月16日に息子のところに行って、余震があった4月まで。

あの4月の余震の時に全然お金がないので、東邦銀行がある新宿かな、あそこに行かなきゃいけなくて。(その後)取りあえず福島に1回行こうということで、(4月)8日に名古屋を出たんですよ。

私たちが息子の家に1カ月近くいて大変じゃないですか。

—長男さんのご家族は？

小林：子どもが2人。あの時はまだ1人だったかも。

—そこに急に家族が増えちゃったもんだから、そうなりますよね。

小林：そう、今考えれば、絶対大変だったなと思う。上げ膳据え膳なんですよ。今考えればわかりますよ。もう3時になったら目が覚めるんですよ。全然、夜寝れないんですよ。新聞読みたくて仕方ないんです。新聞来ると、もうそっと開けて。名古屋って喫茶店のモーニングがいいんですよ。喫茶店に行くと早々とコーヒーを飲むので。もうそこに行くっていうのが自分達の定番になってて、そこで新聞を見る。だけど今考えたら、もう上げ膳据え膳で、すいませんの時代。マンションだったんで、私たちは1部屋だけ頂いてたんです。でも、そのうち息子が、「いやあ、お母さん、会社で社宅どうだっていう話出てるけど」って。これを聞いたときは大変だからマンションから出て、社宅に行ってほしいんだなって思ったんで、行きますって言って。勤め先の工場の社宅を提供していただきました。

—4月頃から社宅を避難者向けに借りたという感じですか？

小林：はい。無償で提供してくれたので。ちゃんと会社の人ケアしてくれました。何か不自由なものありませんかとか。

ー避難者向け住宅みたいな感じで住んでらして？

小林：何か所か提供してくれて、労働組合の人たちが。義援金も頂いて。ありがたかったです。

## ★新聞の誤報

小林：あの頃はもう自分のことで精一杯じゃないですか。それこそ新聞見たら、「南相馬の避難者が五百何人いる」と。あり得ないって言って電話したんですよ。

ーそりゃそうですね。

小林：「すいません、あのね」って新聞社に言ったんですよ。「南相馬には1万3,000人住んでいる小高って区があって、そこが全員避難してるんです、こんな小さい数じゃありません、もっと調べてください」って。あの時、自分たちの存在がなかったというのがすごいショックだったんですよ。自分たちの人数がない、消えてたということがすごいショックだったんです。それで、新聞社2社に電話をして、「ちゃんと調べてください」って。1週間以上たってても、避難の人数がそんな人数なんですよ。

ー正確に伝わってないんですね。

小林：多分発表されてないのか、わかんないんですけど。その後にもう1つ、県の広報が、小高の線量だけ載ってないんですよ。それは何度も県の広報のところに連絡しました。「何で小高がないんでしょう」って。大熊も双葉も富岡も原町も鹿島も全部あるんですけど、1年間小高だけないんです。

ー不思議ですね。

小林：はい分からないです。小高だってそれ（放射線量）が高いところもあるからね。山のほうは浪江と同じぐらいの線量があった。町の中自体はそんなに高くなかったんですけど、やっぱり高速の近くとか、あの辺りは十何マイクロとか、もう浪江と同じぐらいだから。

ー風向きの影響ですよ。

小林：そう、飯館に流れてるから、川房とか大富とかあの辺り高かったんですよ。やっぱりあそこは今もちょっと高いですよ。そういうことがあったからだとは思うんだけど、だったら、低い所も高い所も値を出してくれればいいわけですよ。何で小高だけ出ないんですかとか、もうあの頃は怒ってましたね。自分の場所が知りたいから。

## ★原町の仮設へ

小林：名古屋って（被災者への）支援がすごい。愛知県は一生懸命やってくれて、愛知県被災者支援センターって今もまだ残ってるんですよ。まめに資料とかも送ってくれたり、何か必要じゃありませんかとかって言われたり、名古屋にいた時は声掛けてくれました。原発の補償とか、そういうのが聞きたかったら必ず案内してくれて。そういう面では何も不足ないんですけど、実際の情報がない。

だから、原町の高見町の仮設に入れてもらいました。そうすると小高まで近いんですよ。鹿島の仮設っ

てやっぱり遠くて、小高まで 30 分かかるんですよ。原町だったら、(小高まで) 10 分か 15 分なんで。

ーでは時系列を確認すると…

小林：2011 年 3 月 16 日から 2012 年の 1 月 30 日まで名古屋でした。そのうちの 1 か月は長男のところ  
にいました。

## ★一時立ち入りと愛犬ダルとの再会

ー2012 年の 1 月 30 日でこっち（南相馬市）に戻ってくるのですか。

小林：そうですね、31 日に高見町第 1 仮設住宅。

ー仮設住宅はそこだけですか？

小林：そうです。だから、みんなどんなやっても 5~6 回は動くんです。

最初、原町でしょ、次、福島でしょ。名古屋で 2 回でしょ。で、仮設。5 回か 6 回はみんな動いてま  
す。それがみんなしんどいって言ってましたもんね。

ー高見町第 1 仮設住宅の時は、2012 年 1 月。避難してからそれまでの間に、小高への一時立ち入りはな  
さいましたか。

小林：2011 年の 6 月に一時立ち入り。2 回立ち入りしてます。あと、もう 1 回は業者立ち入りで入れま  
した。それは何でかっていったら、友人の大熊の企業がいわきに寮と工場を造るってことで、寮を借りる  
時に生活に必要なものがないじゃないですか。じゃ、うち(双葉屋旅館)のを全部貸すってことで、立ち  
入って、全部食器からふとんから、あと、洗濯機とかテレビとかをみんな持ってったんです。そこに貸し  
出したんです、2 年ぐらい。その後は避難解除まで保管してもらいました。

ーそれも 2011 年？

小林：そうです。6 月は普通の一時立ち入り。その一時立ち入りっていうのは、南相馬市馬事公苑で受付  
て、タイベック(防護服)着るんですよ。1 世帯あたり、(自宅から持ち出せるのは)黒い袋 1 枚なん  
です。飲み食べ駄目でしょ。立ち入って良い時間は 4 時間かな。マイクロバスにグループごとに何時間  
って決められて入るんです。線量計をさげて家ん中に入って、必要な物だけ取ってくる。その取って  
きて袋に入れた物を馬事公苑の中に戻って来た時に、全部出さなきゃいけない。でも、みんな下着  
とか持って来るから。

ーそうですよね。見られたくないですよ。

小林：あと測ってくれた子たちって、大学生とかのボランティアが多かったです。何々大学ってゼッケン  
をして、測るんですよ。

最初袋に荷物を一生懸命入れるから、もう 1 回入れようとするとうらないんですよ。だから、結局 2 袋  
になるんですよ。一番最初、一時立ち入りの時に持って来たのは自分たちじゃなくて子どもたちのアル  
バムと喪服。兄たちは位牌、そういう物をやっぱり持って来てるかな。あと、ちょっとした着替えとか下着

とかも。そんなのが1袋で目一杯です。

—飼っていた犬の話をお聞きしてよろしいですか。

小林：犬でしょ。2011年の3月末に役所のほうから「レスキュー団体が預かってます」「ユーチューブに載っていますよ」って連絡されたんです。4月にそこまで迎え行って連れて来て、それで、ちょうど袋田（茨城県）にいるおいっ子がうちに預かるよって言って、そこに頼んで。だから、ほんとにほっとした。その連絡が来たのは1週間後ぐらいかな。ダルメシアンだからうちの犬だってすぐ分かるんですよ。ユーチューブにも載ってるけど、ダルちゃんっていうので（ダルビッシュ有選手からとったとのこと）。人が大好きだからすごい寄ってくる。ほんとにあの時は、もう置いて来ちゃって、胸が痛かったです。避難中毎月エサを届けに行きました。

でも、その動物レスキューが入ってくれて助けて、迎えに行ったらきれいにしてくれてました。その犬も2017年ぐらいに腎不全で亡くなっちゃったんですけど。1年後ぐらいに、腫瘍ができたんですよ。たぶん放射線の影響があると思う。だって、外の水、たぶん飲んでたよね。ゴルフボールぐらいの腫瘍ができて。でも、獣医さんは関係ないですって言うんです。えっ、何でそんなはっきり言えんのって、その時思いました。結構ペットのがんとか多かったみたいですよ。

ちゃんとそういうの（放射線とペットの病気の関係）検証すればいいのにね。いいとか悪いとかじゃなく、データとして事実をちゃんと把握しておくべきだと思うんですよ。

—そうですね。

小林：それがちょっと日本に足りないと思う。なにも隠すこともないし、現実が現実だから、ちゃんとやれば、対処できるはずなんだけど。

## ★2012. 01. 31～ 仮設住宅での避難生活

—2012年の1月31日に高見の仮設住宅に入られて、その時、周りに知ってる人は結構いたんですか。

小林：いや、ほとんどいなかったかな。たぶん小高の人が一番多かったのは、イオンの隣の牛越（仮設住宅。南相馬市原町区）。あそこって一番最後にできてから、1回別なところに避難した人がみんな戻って入ってるんですよ。だから、うちの周りでは高見第1仮設住宅にはほとんど知らない人。でも、小高の人はいたと思う。

私は、知らない人ばかりの中だから、こっち（小高）に来ることが多かった。花の世話だったり、片付けだったりが多かったから。

一番あそこ（高見第1仮設住宅）の中でうれしかったのが、外国人さんのグループなんだけど、月1回から2回、汚染されてない食品を一軒一軒に届けて頂けるんですよ。人数によって、じゃがいも、人参、オレンジ、あと、ビスケットとか、そういうものを配るんです。何カールでしたっけ、タレントの。

—ダニエルカールさん。

小林：そう、あの人たちのグループだと思うんだよね。あの人たちがトラックでばんと来て、各仮設住宅のポストに配られたカードを持って行くと食品を渡してくれるんですけど、一番うれしかったですね。じ

やがいもとか、缶詰とか、やっぱり汚染されてない、安心して食べれる物が欲しかったっていうのは自分の中にあったと思う。

—買い物とか行くんだけど、やっぱりちょっと頭の片隅にそれがある。

小林：それがあったかもしれない。海外のなんだけど、ちゃんとそういう物を頂けるっていうのは、やっぱりちょっとうれしかったかな。

だから、本当は、怒ったことあるんだけど、日本の食品を宅配してくれる会社や組合っていうのは、自分たちの会員さんのためにその汚染されてない物を一生懸命やるんだけど、私たち非会員は食べれないじゃないですか、本当は欲しいじゃないですか。でも、来ないんですよ。何でかなって。

—東京に住んでる人とかに行っちゃうわけですね。

小林：そう。

—肝心の、南相馬で仮設に住んでる人たちには届かない。

小林：あの時。ほんとに不安な人たちのために動かないんだなって。今みたいにフェイスブックとかツイッターとかあれば、発信はできたかもしれない。私たちだって、ちゃんと汚染されてない物が欲しいんだよっていうのを発信できたかもしれないけど、その時はそういうもの（やって）なかったから。何でそういうところが来てくれないのかなって、すごい不思議だったの。

1 度名古屋でその団体のイベントがあって、福島からお米持ってった時に、若いお母さんが、「ごめんなさい、やっぱり福島のお米は食べれませんって、買えません」って、生産者の人にもう泣きながら言うんですよ。どっちの気持ちも分かるんですよ。せめぎ合いじゃないけれども、買えませんっていう人と、食べてくださいって、大丈夫、一応調べて食べれるんですよって持って行った人の。その時はすごいシビアに、あ、そうだよな。若いお父さんがいれば確かに買わないと思う。やっぱり安全なものを欲しいっていうのは、その時は思った。その頃ってまだ 2014 年の頃だから、何が安全かちゃんと確立されてないし。だから分かるんですけど、福島から作って持って来た農家さんのおじちゃんがすごい悲しそうだった。そんなことですね。

## ★震災、原発事故後の家族との関係

—震災と原発事故があったことで、ご家族との関係に何か影響はありましたか。家庭内の防災意識が高まったとか、あと、息子さんやお孫さんに会いづらくなったとか、そういう関係の変化はありましたか。

小林：やっぱりここ解除になった時に、遊びにおいでってはいにくいよね。震災前は遊びに来た時に海で一緒に遊んだり、そういうのがあったけど。田舎って山菜採りとか海とか、外で自然と遊ぶものが多いじゃないですか。それができないっていうのが一番大きいかな。

—当時、お孫さんっていうのはお幾つぐらい？

小林：幼稚園の年長さんぐらいかな。

—じゃ、息子さんたちも一番気にするところですよ。

小林：そうそう。1度だけ来て、こないだ2度目かな、来たことは来たけど。そんなですね。あと、何か原発、被ばくとかそういうことで家族でぎくしゃくはしなかった。でもやっぱり、女の子いる人はいろいろあったみたいね、娘さんとか。うちは男の子なんで意外と大丈夫でした。

—震災前とかは、こちら辺で取れたものを送ったりとかっていうことはされてたんですか。

小林：はい。今も送ってる。ここ、南相馬は全量検査してるし、自分たちも放射能測定に行って測ってるので、何が駄目なのか、何がいいのかはだいたい分かるし。農協さんで出してるものを自分たちで測ったことあるけど、出たこと（検出したこと）ないです。だから、そういう面では測ってるっていうことの強みはあるかもしれない。逆に送れる。

—そういうことも息子さんたちと話したりしつつ。

小林：話はしないかな。なんとなく。

### ★心の支えとなったもの

—避難生活中に心の支えとなっていたことがあったら教えてください。

小林：心の支え。たぶん小高駅前の花の世話で、自分はリハビリしたとは思ってる。時間がいっぱいあったし。

自分たちは生かされてるんだなと思ったのは、駅の近くまで流されて亡くなった人の話を聞いたとき。たまたま、立ち話で聞いたんだけど、「えっ」て思った。あの日、自分たちは震災の時に片付けしてたじゃないですか。後から聞いたけど、小高に斎場あって、そこの従業員さんって、夜10時ぐらいまで1階の屋根の上に上がって助けを求めてたらしい。消防署の人が行ったんだけど、そこ1m80cmぐらいの水が来てるのね。1階がもう水没してるから、そこで待ってたらしいんだけど、夜、人の声が聞こえるんだって。ということは、あの時に夕方じゃないですか。私たちはそこまで流されて来てるっていう意識ないから、駅の向こうまで行ってないのよ。もし駅の向こうまで行ってたら、誰か助けられたかなっていうのはあるのね。そんで、その話も聞いたし、あと、そこまで流されて来て、何か月か後にうちのいとこ見つかったんだってという話を聞いたでしょ。そういう人たちの思いじゃないけど、自分たちは生かされてるんだったら、後の自分の人生、ちょっとなんだから頑張ればいいのかってというのが一番の根本。

—そうですね、ほんとそれは大事なことですね。

小林：それが一番ある。それで頑張ってるかもしれない。

## 第3章 小高区の避難指示解除前の出来事

—仮設から時々小高に、入れるようになったのはいつですか。

小林：2015年が準備宿泊で、ちゃんと申請すれば住めました。でも、正式解除は16年です。

—それまでも昼間は入ってよかったですか。

小林：2012年4月16日から立ち入り自由になって、寝泊まりは出来ないけど24時間いいですよと。

—24時間よかったです。

小林：だから、何度聞いても、(行政からの)返事はそれしかないんですよ。じゃ、熟睡しなきゃいいんですねって。いや、警察の人にも聞いたんですよ。警察の人も「ウルトラ警察隊」(東日本大震災、原発事故の被災地で活動するため、全国から出向した警察官で構成するもの。)という名前で、日本中から来てたんですよ。みんな大阪とか、遠くから来た警察の方もここを知りたいとか見たいっていう形で志願して来た人たち多いんですよ。興味あるから、話すんです。

—解除前にそんなことがあったんですね。

小林：そういうこともあったかな。

## ★小高に来る人との交流

小林：結構バスは来るんですよ、(避難指示中の小高を見学する人を乗せた)観光バスが。でも、みんなこうやって窓からのぞいていただけなんです。降りればいいのについて思いながら見てました。降りても、駅前の自転車だけ見ていくんですよ、放置自転車(小高駅前の駐輪場にあった、2011年から置かれたままの自転車。全住民避難を象徴するものとして、避難指示中の小高を訪れた人たちの注目を集めていた)をね。

私、それがあんまりだから、駅にところに赤いポスト置きました。そこにあるノートに、来た人のことを書いてもらうように。今もありますよ、もうしみだらけだけど。書いてくれた。最初は釘にさげてたけど、風で飛んじゃうんで、それでポストを置いて、書いてもらった文章がいっぱいあります。私もたまに書いたりして。それがキャッチボールじゃないけど、何でこっちへ来たのかなっていうのを自分も知りたいし、向こうも何で私がここにいるんだろうみたいな疑問があったと思うので、自分なりにそういうことをやっていました。知りたいっていうことで。

藤島さんっていう人がいたんですよ。小高の人で詩を書いている。避難の時のすごい大変な思いを書いた詩があったんです。それは廣畑(裕子さん)とおんなじ仮設のグループのところの自治会長してた人なんですけど、ヤギを飼っていて、ヤギのエサのために500円の冊子を売ってました。私いっぱい買ってはみんなに配ってたんですよ。これ、私たちの気持ちですって。その仮設でのしんどさがいっぱい書いてあるんです、原発の時の苦しさとか。何年か前に亡くなっちゃったんですけど、当時の私は、これが私たちの気持ちですっていうのをみんなに伝えたくて、会った人にあげてました。

## ★自由な時間

—仮設住宅から小高に通いながら、最初は駅前に花を植えたり、そういう活動をされていたんですね。いつぐらいからですか。

小林：2012年の秋かな、たぶん。パンジーを植えたんですよ。それからですね。2013年だったかな、た

ぶんあのノートと一緒に書いてあると思う。2012年4月16日に、(旅館の)ロビーにお茶を置いたんですよ。誰か来たら、お茶飲もうかなと思って、一応、電気ポットと、ペットボトルと、お茶を旅館のロビーに置いたんですけど、誰も来ないんですよ。誰か来たらと思っていたんですけど、来ないじゃないですか。待っても待っても来ないし、片付けるにも片付けられないしと思って。そのうち、あんまりにも色がないし、なんだかほこりくさいし、嫌だなと思って、駅前の花壇のところにたまたま駅長さんが原町から来てたので、「ここ花植えてもいいですか」って言ったら、「どうぞ、どうぞ」って言うから、そこでパンジーを植えたのが始まり。でも、最終的にあそこの管轄は市だったんですね。駅じゃなかった。

—実は市のものだったんですね。

小林：でも、何にも言われたいんですよ、意外と。あの自由さはいいですね。怒られないっていうの、何やっても。だから、2013年かな、歩道のところにテーブルとみんな声掛けてバーベキューやったんですよ。2015年には廣畑（裕子さん）と久米ちゃん（久米静香さん）と「おだかに行こう」というイベントを開催しました。

—楽しそうですね。

小林：うん、一人500円ぐらい会費を取って、一番最初にチョコフォンデュやって、次が餃子（ぎょうざ）。延長コードをうちから、だあっと延ばして、あの広場のところでやったんです。

—広場って、駅前の？

小林：はい。次にバーベキューやったのかな。次にフリマやって、次、町歩き。だから、考えれば何もなくても楽しむことはできるわけですよ。どうやったら楽しめるか、それってすごく面白かったです。だって、普通なら歩道駄目じゃないですか。でも、歩道OK。何も言われたい。車道も車ほとんど来ないですよ。

—そうなんですか。

小林：うん、あそこで体操しても何も言われたいでしょ。

—体操ですか？

小林：車来ないから、みんなでラジオ体操したこともある。

## ★放射能の測定活動・ウクライナとの繋がり

—2012年4月に日中の立ち入りが解除になって、それからずっといろいろやっておられるんですね。それと並行して線量を測ったりとかも。放射線量の測定を始められたのはいつ頃ですか？

小林：(放射能を測定する団体が)2012年からボランティアやってたので、その時からもう。2011年から測定のマップは作ってたんで、その測定のボランティアには行きました。4月と10月に年2回やってたんで、それに参加してました。

ー今は友子さんたちが自分らでやってらっしゃるけど、最初は別の団体が？

小林：NPO のチェルノブイリ救援・中部っていうところが始めてたので。

ーその団体とつながったきっかけって、何かあったんですか。

小林：名古屋ですね。愛知県被災者支援センターの職員の中にチェルノブイリ救援・中部に所属してる方がいて、2012年に南相馬に帰るってあいさつに行った時に、「今度、南相馬に行くから会いませんか」って言われて、そこで会って、そこで測定するけど、ボランティアしませんかって言われて。その後に、「お父さん、パチンコしてるだけじゃないよ、行きなっ」て言って、火水木金の週4日、ボランティアを始めたんです。私はどっちかっていうと、小高に行ったり来たりしてた。

ー旦那さんが測定をしていたのですね。やっぱりご自身で測定してみて、何か意識が変わったりとかってありましたか？

小林：いや、やっぱりなんでも知ってるということですね。家の中も決してゼロじゃないし、カーテンとか測れば出るし、フィルターからも出るってことは、気を付けるのは外だけじゃないよねって。中にも入ってるし、やっぱりちゃんと除染ってしないとイケないっていうのがあった。

ー逆に、測ってみたら、思ったより小高は風向きの影響低かったなとか、そういうのはありましたか？

小林：浪江を測って、差がよく分かりました。

ー浪江も測って、小高の線量がいわば客観的に見れたというか。

小林：そうですね。うちの主人に言わせると、チェルノブイリ、ウクライナに行って、ジトーミル州が（原発事故から）26年たった時に0.3（マイクロシーベルト/時）だったんですよね。ここ（小高）の町の中が0.3から0.4だったんですよ。ってことは、30年後はもうちょっと落ちるから、いずれはここは住めるんだろうなっていう思いはあったかもしれない。

ーチェルノブイリに初めて行かれたのっていつでしたっけ。

小林：2013年。

ーそれも、チェルノブイリ救援・中部のツアーで旦那さんと2人ですか。

小林：そうですね。その他に行った人たちは、岐阜の高山の県会議員さん1人と、あと、たぶん新潟の県会議員さん2人と、途中で茨城大の久保田守先生。バンダジェフスキー（当時ベラルーシのゴメリ医科大学学長として10年にわたり汚染地域住民への放射線被曝の研究に従事したユーリ・バンダジェフスキー氏）が書いた本の翻訳者が、低線量被ばくのその講義を受けるっていうことで、最初の時に参加したんですよ。あと、チェル救の3人ぐらいいたのかな、それは何でかって言ったら、向こうのNPOにいろんな物を届けるために、年1回ぐらいは行ってみたいなんで、そんな時に合わせて私たちも行ったっていうこと。最初は9月でしたね。

ー9月。その後はほぼ毎年ぐらい行ってますか？

小林：いや、そんなに行っていない。2016年と2017年。16年は30周年。17年はチェルノブイリ原発事故の避難者に、小高に来てもらうための打ち合わせ。すぎた（和人）さんに映像も撮ってもらうために一緒についていってもらって、3回行きました。

ーチェルノブイリ、耳では聞いたことあっても、実際行くのは初めてだったと思うんですけど、実際行って見て、何か感じたこととか考えたことってありますか？

小林：ゼムリヤキっていう団体（チェルノブイリ被災者の慈善市民団体）の人たちの話を聞いたんですよ。結構向こうではそういう人たちが病気を患ってるって聞きました。やっぱりいろんなところに病気があって、手術したりなんかしながら暮らしてたんですけど、でも、「大丈夫だよ、人生そんなに希望がないわけじゃない」って。希望がそれなりにあるし、毎日ちゃんと体操して元気で。その人、自分の体の傷を見せてくれたりして、「これだけ手術しても、僕は元気なんです」って言ってくれたんですよ。何に驚いたかって言ったら、向こうの人、率直に全部聞いたこと答えてをくれるんです。

原発（事故）の影響の病気っていう診断をする場所も、あるんですって。その影響だとか影響じゃないよっていう区別をできる委員会みたいな、先生たちがいるんですよ。だから、そういうことがきちっとやれてるっていうのがよかった。あと一番はジトーミル州で、子どもたちのために芸術学校っていう自由に行ける場所があって、絵を描いたり、ダンスしたり、歌を歌ったり、あと、伝統的な手芸をできる場所。先生が必ず付いて無料の、芸術学校があるんですよ。子どもたちへの支援に対してウクライナってすごいなっていうのはそういうところ。子どもたちのために一生懸命やってる。

そういう制度、日本に足りないなと思いつつながら。日本にはサマースクールってないじゃないですか。向こうには保養っていうものがあるって、必ず非汚染地域に行くんですよ。（保養……普段線量が高い地域にいる人が、線量が低い地域で過ごし、心身ともにリフレッシュできるようにする取り組み。）大人もあるんですよ、年に何回って。そういう、人の命とか健康に対する考え方が日本軽いなってちょっと思っちゃったりする。だから、そういう面で、いいとこだけじゃないはずけども、やっぱり（チェルノブイリの）いいところは取り入れればいいのかになって。いっぱい視察してる割には何もないなっていうような感想としてある。

ー逆に、友子さん、実際にチェルノブイリに行ったことで、小高でもこういうことやれるなとか、やりたくなっているのがだんだん見えてきましたか？

小林：小高にあったらいいなっていうのは、あったかな。

測ることで、目には見えないけど、コロナはほんとに分かんないけど、まだ放射能は「ここに、ほら、あるよ」って、可視化できるじゃないですか。だから、それをやっぱり最大限にほんとは活かさなきゃいけないと思ってるんですよ。それで、なおかつ、ここは入っちゃいけないよっていう場所が必要なんだけど、日本に1カ所もないんですよ。向こうだとよくレントゲン室のどこにある、あの（放射線の）マーク付いてるのがあるんです。ここは危ないよっていうの。でも、日本にはそういうのがないんです。

それで、（チェルノブイリで）子どもたちに森は入っちゃいけないよとか、あとは消防署の人たちが火事を起こしちゃいけない（と伝えている）。何でかって、やっぱり舞い上がったら吸っちゃうんですよ。そうすると、被ばくしちゃうっていうことを伝えている。

—チェルノブイリでは子どもにも、森は入っちゃいけないと言ってるけど。

小林：そうそう。気を付けなさいって。

—確かに日本では、見かけないですよ。

小林：こないだもちょっと「ここちょっと（放射線量が）高えんじゃないか」っていうところがあって。「じゃ、測りに行こう」って言って測ったら、「えっ？これ駄目じゃん」って。空間線量はそうでもなくても、やっぱり下にある、土が汚染されてるから、それを踏んだり触ったりしたら、いいことないので。やっぱりリスクはなるべく避けたほうがいいはずなんで。

あと、大熊もそうなんだけど、めっちゃ高い場所はあるんですよ。だから、そこを大丈夫っていうのは、気を付けようっていうのが1つもないっていうのは（どうなんだろうというのが）、私の今の感想かな。大丈夫じゃないんだよね。もうちょっと気を付けながら暮らそうよっていうのは、やっぱり言い続けるべきかなとは思ってるんですけど。

（大川原の）役所のほうはいいんですよ。大熊でもそんなに高くない場所なんで。ただ、大野駅の周り高いんですよ。（除染をしても放射性物質が十分に）取り切れてないところがあるのに、もう何でも大丈夫の状況になってるっていうのはちょっとクエスチョンマークだなと思ってんですけど。

—友子さんたちは実際に毎年放射線量を測って、マップにしてらっしゃるから、色々感じておられることはあるんですね。いま、福島は全部危ないと思ってる人もいれば、福島は全部安全みたいに感じている人もいるような気がします。

小林：もう大丈夫ってね。だけど、やっぱりほんとは10年早いような気がするのね。全てを解除っていうか、そういう状況にするには、10年もうちょっと待ってほしかったなって。知らない人たちがいっぱい来てて、普通にやるっていうことの、ほんとにリスクないの？っていうのが。ないかもしれないけど、でも、リスクはあるっていうふうにされて、今まで入っちゃいけなかったんだから、だったら、気を付けるっていうことが重要じゃないのかなってのが感想です。

—みんな、以前は線量計を持ち歩いていましたもんね。

小林：みんな忘れちゃうんです。私も時々忘れるけど。やっぱり車にウクライナ製の線量計付けてると、0.3で鳴るんですよ。ってことは、年間1ミリシーベルトになるっていうとこなんだけど、それ以上は当たらないほうがいいよっていうのが以前からの基準じゃないですか。

もう山麓線（県道34号線）になると、びって、ずっと鳴るんですよ。浪江から双葉、大熊、あの辺りずっと鳴り続けるっていうことは、やっぱり高いところに行くと分かるんだけど、10マイクロとか4、5～6マイクロの場所に1日いたら体がすごい疲れるんです。やっぱりダメージが来んですよ。だから、そこに帰っていいっていうのが、やっぱりちょっと早いよねって思うのが、私の今の感想。

## ★放射能について知ること

—放射能について知ることの意義はどんなことだと思いますか？

小林：自分たちの年代の時、小学校の頃かな、よく水爆の実験があったんですよ。あの時に雨が降ると髪

の毛が抜けるとか、いろいろ、放射能の話とかやっぱりあったので、傘は必ずさすんだよっていうのをその時に聞いてた。だから、原発事故の後、その時は犬がいたんで散歩させる時に、フード付きのカバーをして散歩したかな。やっぱりその意識はあった。

だから、そういうことを伝えられていると、やっぱりその時に実際なった時に、自分が対処できる。少しでもリスクは下げられるから、みんなも放射能っていうのをちゃんと学んでくれたらありがたいなと思っているね。放射能の危険って、結局は今現在あるんですよ。あるから、その原発事故の時に福島の人たちはどんな対応をしたのかっていうのは、やっぱり知っておくべきかなって思ってるんですよ。

だから、どうすればいいか。自分も知らないから、原町に「南相馬放射能測定センターとどけ鳥」っていうのを名古屋の団体がつくった時に自分もボランティアで入ったんですよ。それから、空間線量がどういうふうに変ってるかを毎年調べていて、10年近く続けています。

あと、放射能って何だろうって思った時に、やっぱり放射性物質っていうのは、土にも付いてるんですよ。チェルノブイリにも行ったんですけど、内部被ばくしないように、取り込まないことが一番っていうことを教えてもらった。測ることと、体内に取り込まないこと、(線量が)高いところは気を付けましょうっていうのはずっと心がけてることの1つ。

## ★震災後の双葉屋旅館改修工事について

ー過去のインタビューの記事で、定年後ゆったりする予定だったというのを拝見しました。震災後に旅館の改修工事をしてまで、この仕事を続けていこうと思ったきっかけがあれば教えてください。

小林：名古屋にいた時に、ハローワークに行ったんです。まだ仕事したいなっていうか、ぼうっとしてんのもいやだから。でももう年齢でアウトなんですよ。あと何年働くかも分からないってことで、避難者ですし、やっぱりハードル高かったです。

じゃ、どうしようかなと思って、ぶらぶらはするんですけど、毎日何にもしないっていう状況はすごくしんどいです、逆に。1年、行ったり来たりすることが多かったので、原町に仮設ができるよって聞いた時に申し込んだんですよ。

2012年から、ここ(小高に)立ち入りはできるようになったので、毎日のように(原町の仮設住宅から小高に通った)。何でかっていうと、仮設、やっぱりちょっとつらいんですよ。いや、何の不自由もないんですよ。何の不自由もないんですけど、安否確認がつかかったです。トントンって。

ー見回りがあったということですか。

小林：そうなの。

ー向こうが回ってくる。

小林：そうそう。ほっといてくれればいいのになって。けど私変にわがままなんで。だから、こっちに来て、ここ(双葉屋旅館)も改修するって決めたのが2012年の第5次のグループ助成金に申請した時でした。初めて被災地っていうか、20キロ圏内に出たグループ助成金なんですけど、それに応募したんです。

ー改修工事はどんな様子でしたか

小林：もう実際 2013 年から、災害ボランティアさんをお願いして片付けから始めました。ここ（福島第一原子力発電所 20km 圏内）片付けた物って、よそ（福島第一原子力発電所 20km 圏外）に持っていけないんです。その駐車場にぶわっと並べて置いといた。原町の焼却炉にも出せないし、業者のほうも持って行けないし。だから、なかなか進まないんですよ。あと、業者の人も 1 人か 2 人しか大工さんいないし。地元の人お願いしたから、よけい人手がないんですよ。自分の年齢ぐらいの人が仕事しているから進まないんです。で、やっぱり改修工事は 2 年かかりました。2015 年まで。

## ★ゼロからの復帰

—インターネットの記事で、小高を「一度ゼロになってしまった町」と表現なさっていたのですが、戻って住もうと決断するまでに、悩んだり躊躇なさったりはありましたか。

小林：ここ（小高）と他のところ（避難指示区域）の違いは、2012 年から一応夜遅くまで入れたんですよ。ってことは、ほんとに真っ暗なんです。ちょうど電源切れてて、街灯も真っ暗、家の明かりもない。その中でぼつっと明かりがつくと、「あ、いいな」って。今回の私たちがやってるアーカイブの題名として、「おだかのあかり」ってあるんだけど、6 号線に 20 キロ圏内のところってゲートがあって、そこって許可証がないと、前は通れなかったの。その間って真っ暗なの、ど真ん中はほんとに。原町のゲートから小高、浪江、双葉、大熊、富岡のゲートまで。家はあるのよ。建物、壊れたり何かしてあるんだけど、人が、明かりがないのよ。街灯がぼつんぼつんとあるだけ。家はいっぱいあるの。だけど、明かりがないの。そういうのってたぶん経験しないと感じないかもしれない。

それが 2015 年、準備宿泊が始まるちょっと前ぐらいから、小高にぼつんぼつんって、「あそこの家、明かりついた」ってなった。次、こっちに明かりがついた。ゼロなんだけど、家はあるのよ。だったら、ここでいいかなって。ここでいいじゃないって思うので、2013 年から改修工事を始めてきた。

確かにゼロにはなったんだけど、でも、何にもなかったから今があるから、いいかなって思う。ここまでできるっていう思いはあの頃はなかったかもしれない。ただ単に家にいて住めればいいかな、年金で暮らせればいいかなぐらいの思いでいて、たまに誰かお客さん泊ったら、どうぞぐらいの感じでいいかなっていうふうに思って始めたから、やるぞっていうような気持ちはなかった。だから、ゼロだったけど、一つずつ始まったかなって。

不自由なんだけど、よく（小高に）移住して来た人に「どう？」ってたら、「いや、不自由の良さがある」って。「何でもあるものより不自由の良さがあるんだよね」っていうふうに。だから、あれもない、足りない、これも足りないって思うけども良さがある。

でも、せめてちょっと最低限のものが、医療と足の便は欲しいかな、やっぱり。医療は 1 カ所でもいいんだよね。ちゃんと診てくれる場所があれば。足の便も自由に乘れて降りれる（循環バスなど）、それさえあれば何もたぶんそんなに不自由は感じないと思う。電車も通り始めたし。最初の頃、電車なんかなかったからね。

—原ノ町駅まででしたね。

小林：そうなんです。だからといって、何かすごい不満だったかっていうと、何にもない良さって確かにあったなっちは思う。

## 第4章 避難指示解除後の生活に関して

### ★小高に戻ってきた人達が泊まれる場所

—小高区の避難指示解除後の生活についてお聞かせください。

小林：解除後ね。解除後は旅館の再建ってか、2013年から旅館の改修工事始まって2015年に工事が終わったので、2015年からは（原町の）仮設住宅よりもこっち（小高）のほうが多かったかな。

—住むのは。

小林：うん。一応（原町の仮設住宅を）返すって言ったら、駄目ですって言われたの。「基本的にここ（小高）は準備宿泊の場所だから、まだ解除前だから、住所は取りあえず仮設の住所にしてまだ返さないでください」って言われた。

2015年の8月ぐらいから準備宿泊で双葉屋旅館に泊まり続けてました。お客さんはまだ受け入れられなかったんだけど、2016年の1月から、市のほうから、「こちらに戻ってきて家の片付けとか手続きで泊まる人を受け入れてくれ」って言われて。じゃあ、うちは3部屋は受けますと。全館じゃなくて。だって、そんなに来るわけじゃないじゃないですか。実際そんなに来なかったんです。だから、3世帯ぐらいは受け入れられますって、3部屋。何かあった時は、空いてれば受け入れられるので。それで受けたんです。

その人たちは家の片付けとか、あと手続きとか、墓参りとか、こちらに来ないと、泊まってかないといけない人たち。それは市のほうが泊まり分を出してくれたのかな。1カ月、アパートとおんなじように、その1部屋分を丸ごとの形で貸してたのかな。1部屋定額で受けました（市から支払われた）。それが約2年間。

—2016年1月から2年。

小林：そうそう。2018年の1月まで。2年ぐらい受けてました。3部屋を提供するっていう形で契約してました。

—市からその分のお金が支払われていたのですよね。受け入れ人数に制限はあったのですか。

小林：一室2~3人。その代わりご飯は自己負担で。泊まった方が負担するというので。そういうのを受けてたんです。

—それは基本、小高に住所のある方ですね。

小林：そうですね。

### ★小高の復興に携わる人が集まる場所へ

—じゃあ、小高以外からのお客さんが泊まれるようになったのは…。

小林：泊まれるようになったのは、正式には2016年7月12日。解除の日。

—福島大学もそれからずっと使わせていただけてますけど、いろんな人が双葉屋旅館に泊まりに来ていますよね。

小林：ですね。でも最初は、そんなに来てはいなかったんですけど。何年からだろう。多分みなみそうま復興大学が始まってからですね。(みなみそうま復興大学……南相馬市が、大学等が南相馬市内で行うフィールドワーク等を支援する事業。)復興大学の制度ができてから、最初1年ぐらいは多分、避難(指示が出ていた)区域として、うちが指定旅館みたいになってて、それで受け入れたんです。次の年からは南相馬全域の旅館を対象にやってほしいって私たちお願いしたんだね。何でかっていったら、やっぱりうちばかりそういう人たち受け入れても、受け入れ切れなかったら学生さんも困るし、他の旅館さんやホテルが受けてくれたほうがいいじゃないですか。だから、それを市のほうに提案して。それからどこでも1人1泊3,000円っていう援助が出たんです。

—「みなみそうま復興大学」の制度で、学生が南相馬に泊まる時に市から助成金が出ると。

小林：そうですね。

—それで学生が増え出した。

小林：そうですね、それもあると思います。それで、南相馬のフィールドワークができたんだと思います。

あと、それから、コロナ前は結構企業研修を受けてたんです、あすびと福島(福島創生の次世代人材づくりに取り組む、南相馬市の一般社団法人)の。だから、いろんな一部上場の会社の方たちの新人研修とかも受けてた。あとは、ボランティアの人たち。小高の人たち。それと、ここに来たいっていう人たちかな。最初の頃は。

最初の頃、2016年頃は、JRさんの鉄道の仕事で受けたこともあるかな。線路の。半年、何カ月だろう。何カ月間か。5~6人ですけど受け入れてました。(小高まで鉄道が再開した後、今度は)小高から浪江に行く(再開通のために工事が必要になる)じゃないですか。その時にJRさんの工事の人たちが復興の仕事で泊まっていたり。

除染の人たちはほとんどこういうところは泊まらない。除染の人たちは主に宿舎みたいなところに泊まっていたので。(除染以外の)工事の人たちが泊まっていた。

最初は、小高の人受けてた時って、朝食しか出さなかったんです。自分も5年間(作っていないと)、作る量が分からなくなる。自分たち2人分(友子さんと旦那さんの2人)しか作ってない料理をまた10人以上作るのは大変。2人分作る時も大変だったの。どうやって、どのぐらいの量かって。逆に今度戻ってきて、さあ料理を作りますよってなった時、どんぐらいだったんだらうってのが忘れてしまって。それがちょっとリハビリじゃないけど。朝ご飯だけは出しますよって、リハビリの形で始めたのね。だからその前は、食事はあまり出さなかったの。

そのうち谷地さん(谷地魚店)や三上さん(三上魚店)が戻ってきて、小高に魚屋さんができて、夕飯も作れるなって。あと、食材もエンガワ商店(2015年9月に小高区に帰還準備に来ている住民にとっての生活インフラとして開店した「東町エンガワ商店」のこと。2018年12月に閉店)もできて(調達できるようになった)。それができなかつたらちょっと無理だったかなって、ご飯出すのは。食事を出すのは、

やっぱりそういうお店がないとここでできないかなって気がする。

元の作る時の勘だったり味付けだったりに戻るまでというかに時間はちょっとかかったかな。大人数の分を出すとき、最初やっぱりちょっと怖かったかな。

—2016年の1月からは朝食しか出していなかった。で、7月に小高以外からの人も泊めて、だんだん夕飯も出すようになった。

小林：そうそう。その前は朝食のみで（宿泊者を）受けてました。あと、コンビニが始まったので、コンビニで皆さん買って食べてたんじゃないかなと。

—海外のお客さまも大勢双葉屋旅館に来られますよね。あれは最初からだったんですか。

小林：ジャーナリストの人たちとか来てたんです。隣のランタンハウスができて（2017年9月に開業した双葉屋旅館隣の宿泊施設「ザ ランタンハウス」のこと）、海外の人たち受け入れるようになってから、うちにも何人か泊まるようになって。その頃はそんなにいっぱい泊まらなかったんですけど、そのうち福島大学や他の大学の留学生や、外国の大学からも。

そういうので海外の人たちが泊まり始めたのかな。英語は話せないけど、まあ何とか。去年おととしぐらいからは、Google 翻訳っていいものがあったって助かってます。その前はポケトークみたいなものがあったんです。でも、あれ大変なんです。それよりはるかに Google のほうが使いやすい。

—便利ですよ。

小林：ちゃんと日本語でも出るし、英語でも出るし、どんな言語でも出てくるので。簡単な用事はそれでできる。旅館だから、いろんなこと説明するガイドじゃないので。ご飯どんなの食べますか、何か嫌いなものありますかとか、お風呂はこうですよとかっていうぐらいは Google 翻訳で大丈夫。向こうも、ちゃんと日本語に訳したものをを見せてくれるから。何となくのコミュニケーションは、最低のコミュニケーションは取れる。

何でだったら（海外の人が何で来るか）、やっぱり福島どうなってるってのが関心あるんでしょう。

—なるほど。旅館に来る学生さんとか、いろんな人との対話の中で、新たな発見など、逆に何か気付かされたことはありますか？

小林：新たな発見ね。学生さんたち、あんまり質問してこないの。だから、逆にこっちが聞くんだけど。それで気付くってよりも、よく廣畑（裕子さん）言うじゃないですか。知らないことが一番だから、ここで知っていくことが大事だよって。だから、そういうことだと思うんです。

多分、初めて来る人たちが多いから、福島どうなってんだろうって、どういうことなのっていうのが疑問で来るから、そこにちゃんと答えられるようなことを自分はしたいなと思ってるから、自分たちも学ぶし。でも、今若い子たちは真剣に聞いてくれる。素直に。原発とか何々じゃなく、「どうして」っていう疑問から来るから、すごくそれは私にとってはいいなって思うんだけど。最初っから先入観でもって来るんじゃないくて、「自分たちは知りたいんだよね」っていう形で来てくれるから。

確かに日本の国自体もそうだけど、原発だったり放射能に関しては意外と何も伝わってなかったんだなってのが、逆に気付かされたんだなって。だから、こちらから伝えなきゃいけないんだと思って、今、

アーカイブとかをやろうとしてるんだけど。

## ★商工会女性部部長として

—双葉屋旅館再建の他にされていたことはありますか。

小林：解除前の 2015 年ぐらいからかな、商工会女性部の部長をしてきました。前の部長から指名されて、「じゃあ 1 期だけ」って。1 期って 2 年なんですけど、1 期だけならいいと。「旅館が始まったら無理です」と言ったんですけど、誰も代わりがないって、引き継いでくれないから辞めれないわけです。商工会の女性部も震災前は 70 人いたのが、今 30 人切っちゃったんです。でも、その中で営業してる人ってほんとに少なく。実際問題、女性部って奥さんだったり娘だったり、従業員でもいいんだけど、小高で事業やってる人の家族が所属する団体なんです。そこに入ってる人が少なくなっちゃったのね。

その中でどんなことができるかっていうのを（考えて）。最初は結構、みんな勢いあるんだけど、それが 2 年、3 年、4 年、経つと。ましてコロナが入って全ての行事が中止になったじゃないですか。その間に熱がやっぱり消えていくというか、継承してかなきゃいけないとか、そういうものがだんだん希薄になるのかな。あと、年齢が。女性部の年齢もみんな、10 年たってるわけだから。活動として、できることを今やってるんだけど、これがどこまで続くかは、次の人たちをどうやって入れるかに懸かっているのね。

一番の成果は、ひまわりカフェがまだ続いていることかな。そこでまだつなぎはあるから。あと、私たち月 1 回何か講習会みたいなのをやろうってのを掲げてるので、研修旅行とか、いろんな、こんなのやりたいねって企画を考えてます。去年はかしわ餅を作ろうって。で、部員の人のお願いする。でも、部員の人のお願いすると、講師料出せないのよ。

—なるほど

小林：出したいんだけど出せないっていうのが。別に部員だって教えてくれるのはありがたいから、謝礼あってもいいのになと思うんだけど、駄目なんだそうです。そんなことで、パン屋さんに講師をお願いしたり、お菓子屋さんのご主人にかしわ餅の作り方とかを教わったり。（専門の講師の人を）頼むと講師料として逆に高過ぎるじゃないですか。

—そうですね。

小林：だから、その辺がちょっと難しいんだけど。それでも、そんなことをやりながら女性部は続けたのね。で、毎年秋まつり（おだか秋まつり）ってのがあって。それは一大イベントだから、それに協力するっていうのが女性部の今の仕事です。それをまだ続けております。

—2015 年に部長になったんですね。それまでも、女性部にはずっと所属していたんですか。

小林：ずっとってうか。

—柏から小高に戻ってきてからですね。

小林：そう戻ってきて、うちの母は入ってるけど出なかったから、私どんなもんかなって出始めたの。そしたら震災になったって感じなんですけど。震災になったら仕事も何もないから、じゃあって。暇ならで

きるじゃないですか。そしたらいつの間にか部長っていうし、やってるわけです。頼りない部長です。

—いやいや。

小林：あと、もう一つは地域協議会。小高区地域協議会の委員として。女性部の部長なので、商工会から1人出るっていう枠の中で出てるんです。そこでいろんな提案だったり案件をみんなと協議したりすると、町とかの市の行政とかいろいろよく分かるんです。

—それは市がやってる協議会ですか。

小林：そうです。本来だったら南相馬市ってまとめればいいんだけど、もう最初から鹿島区、原町区、小高区って3つに分かれた協議会になってんです。だから、そこで協議をずっと。委員としてまだ所属しています。

—それは行政の人、市役所の人も出て。

小林：そうそう。

—それぞれの代表が委員として出てみたい感じですね。

小林：そうです。教育のほうからとか農業とか。団体の代表と、それ以外に自己推薦とか。あとは、公的な推薦みたいな形で何人か。そういうのに出てます。あと関わってるのは、移住してきた人たちや、してくる人たちのお手伝い。いわゆる移住のお世話役です。別に市役所の指示で動いてるわけじゃないんだけど、うちって旅館だから、そういう人たち泊まると、いろいろ聞かれるんです。お世話すると、その人たちがたまたま移住の人だったりするので。そういう人たちがここで住みやすくなるために住宅を探してあげたり、お手伝いするってのが、今やってることかな。

—なるほど。

小林：主にそれが多いかな。じゃあ、ここ聞いてあげるよとか。そういうことですかね。

—商工会女性部は、「ひまわりカフェ」というカフェを小高浮舟ふれあい広場で運営なさっていますよね。これは友子さんが部長になってから始めたのですか？

小林：あの建物（ふれあい広場）自体が震災前の2010年にできたはずなんです。私は知らなかったんですけど、震災前にも、ひまわりカフェじゃないけど、「ひまわり」という軽食屋をふれあい広場で女性部の先輩たちが始めてたんです。

—震災前。

小林：うん。私はその状況は知らなかったんですけど、後で聞いたら、そこで女性部の先輩たちがお昼を出してたみたいなんです。

あそこは建物壊れなかったし、全て使えたので、よくボランティアの人たちが休憩所として使ってたんです。じゃあ、あそこで女性部カフェできないかなっていう、前の部長の願いがあって。商工会の総会で、あそこ使えますかってお願いして。それで始めたんです。何でかっていうと、2015年ごろ、休む場所が

意外となかったんです。だから地元の人が気楽に来て、お昼にお茶飲める場所としてやろうっていうことを決めて。今、私はほとんど出れないので、主に部員さんで、出れる人たちが運営してくれてます。それは、カフェのお金として積み立てていってるんですけど。

震災前、女性部で不要品のフリーマーケットをやって、上町の空店舗で売っていたんです。その収益が残ってて。私もそこ行ったことあるんですけど、みんなの衣服とか食器とかを置いて、その売り上げをストックしてたんです。

—フリーマーケットで。

小林：女性部の活動費として。

—それは震災前？

小林：震災前。それが女性部の基本かな。フリマをやって、それが小高商工会女性部の活動資金としてあって。

あともう一つ、震災直後の活動として、小高駒馬っていうのを部員でみんなで作って、ストラップにして。最初はお礼としてあげただけど、結構評判良かったので、それを1個幾らで売ったんです。KIRAでもそうだし、それも資金として入れといて。小高駒馬作るの大変なんです、私向かないです。1日に2つ作ればいいほう。

—お1人で。

小林：そうそう。駒馬って馬のキーホルダーなんですけど、2013年、女性部の有志に150個作ってもらって、私ウクライナに持ってったんです。

—それを女性部でみんなで作って。そういうのを元資金にして、ひまわりカフェを始めたんですね。

小林：そうですね。

—解除の後にオープンでしたか？

小林：あそこ自体は解除前から開いてただけど。

—解除前からやってた。

小林：ひまわりカフェは2015年の7月5日から始めたと記憶してます。KIRAもやって、ひまわりカフェもやって。2015年7月15日に大々的にNHKの「あさいチ」が来て生中継してました。

—ひまわりカフェに「あさいチ」の写真ありますもんね。

小林：そう、「あさいチ」で。70人来たんだよ、スタッフ。

—70人！NHKのスタッフですか。

小林：そこに小高のお菓子をみんな差し入れしようと思って。30あれば間に合うだろうなって思って買ってたら。「何人ですか？え、70！？」って。びっくりした。バス2台で来たと思う、確か。

—NHK ってやっぱり規模大きいですか。

小林：すごかった。NHK ってすごいなって。

—有働さん（有働由美子、当時あさイチの司会）とか柳澤さん（柳澤秀夫、当時 NHK 解説委員）とかみんなが来てましたね。

小林：そうですね。

—イノッチ（井ノ原快彦、当時あさイチの司会）も来てました？

小林：イノッチも。

—小高から生放送でしたね。

小林：7月だよ。やっぱりこの避難区域の中で、小高はそういう面では早かったんですよ。

—そうですね

小林：2015年の7月にひまわりカフェをオープンして、2016年7月12日、避難解除の日に1周年記念を兼ねて、振る舞いカレーをやった時、多くの取材が来て。商工会の事務所はみんな閉めて、のぞいてるだけで誰も出てこない。市役所も来ない。女性部だけ孤軍奮闘して、何よこれって。おかしくない？って思っ

て。ほんとは1年後どうするってなった時に、浪江の人から、「解除の時何かやらないの？」って（言われて）。「え？解除ってお祝いじゃないよね」っていうのがあったんです。今は分からないけど、あの頃自分たちの中で解除って万歳じゃなかったの。そういう思いがあったから、みんな誰もうれしそうな顔も何もしないで。

—そうなんです

小林：でも、記念だから、私たち1年の思いも込めて、ひまわりカフェ1周年の記念としてやろうっていうことでやったんだけど。孤軍奮闘でした。他のところはどこもやらずに静かに見守っていました。

—そうだったんですね。

小林：そう。みんな冷たい感じがしたけど。でも、お客さんいっぱいいました。あれが7月12日だったんです。2016年の7月。多分私、これ、写真撮る暇なかったはず。

—そうですね、カレー作んなきゃいけないんで。

小林：そう、野菜カレー。その時は、サッカー日本代表の西シェフ（小高出身の西芳輝シェフのこと。）からレシピを頂いて、夏野菜カレーっていう形を出したんです。忙しかったです。写真はひまわりカフェにあります。西シェフにも来ていただきました。

## ★K I R A ・ 希 来 の 杜

—KIRA (双葉屋旅館の隣にあるアンテナショップ、インタビュー時は休業中)についてお聞かせください。

小林: あそこ (KIRA)、元はお茶店だったんですよ。そこがワーカーズベースの和田君 (株式会社小高ワーカーズベース代表取締役 和田智行氏) の事務所だった。事務所にして、その隣が倉庫だったんですけど、倉庫をアンテナショップにしようと思ったんです (2015 年時)。何でかっていうと、解除前だったので休むところなかったんです。立ち入り自由だったので人は来るんですよ。

気楽に入れるように物を置けば、買い物で、ふらっと入れるじゃないですか。だから、あそこでお茶を出そうと思って、常にお茶の用意をしてもらって。その店番をしてくれたのがボランティアで知り合った脇さんっていうご夫婦なんですけど、その奥さんと、お子さんがあの時、1 歳か 2 歳かな、まだ幼稚園前なんですけど、ずっと手伝っていただいたんですよ。月幾らっていう形でお支払いっていうか、ちょっとしたお小遣いしかならなかったんですけど、やってくれました。

それが 2017 年ぐらいまでやってもらったのかな。その後に向かいの新開さんがやってくれていました。(お店に) 置いてた物って仮設で手作りしてたもの。そこに置いてもらって、うちは 10% だけを手数料としていただいて、あとは作った人たちに全部バックしてたんです。

ただ、仮設からだんだん (人が) 出て行くと共に、そういう物を作ることが少なくなってきた。あと、そういう手作りの物を買っていく人って、やっぱり本物じゃないけど、質のいい物を求めていくんですよ、人なんで。最初は支援と思って買っていくんですけど、それが支援じゃなく、お土産としてちゃんとした物が欲しい。それとやっぱりちょっとずれてきたかなって。だから、売上もちょっと (下がって)。そういうラフな感じでのショップだったんで、それからちゃんとした物を、ここにはない物をちょっと作りたいなど。

それから私たち、菜種油を作ってた。そこに置くために、そこで販売もできるようにっていう思いで。コロナ前の 2020 年にアンテナショップ KIRA を改装して。小高ワーカーズベースの事務所が出たので、東京大学のデザインセンター (小高復興デザインセンター) の事務所として提供してたんですけど、そこもだんだん終わってくる。やっぱり、ずっと続けられるわけじゃない事業だったから。

それで「KIRA～花と香り～」、花とお茶の店っていうので。自分も花にずっと関わってたから、ちょっとやってみようと思ったけど、やっぱりなかなか大変ですね。ちゃんとした物を販売するために、ちゃんとした物を仕入れて、それから利益を取るって。それで、従業員さんにお金を支払うってのは、難しかったですね。

今回休業っていうのは、店長さんをしてた方が 2022 年 3 月の地震で被災されて退職されたからです。

今、KIRA はどうするか、何にしようかとかっていうのはいろいろ考えてるんです。アンテナショップを一番最初に始めたのは、誰でも来て、ちょっとお茶飲めて、お話しして、あと、買い物をしてくれる場所として提供できたらと思って作ってみました。

—先ほど菜種油のお話がありましたが、どうして菜種油を作ることになったんですか？

小林: 私たち、南相馬放射能測定センター「とどけ鳥」っていう場所にボランティアで所属してたんです。そこって、チェルノブイリ救援・中部が親会で、所長を派遣して運営してたんです。2011 年からその事務所あったんだけど、2012 年に私たち名古屋から戻ってきて、そこに所属した時に聞いたのが、セシウ

ムは油に移行しないこと。最初はヒマワリって言ってたんですけど、ヒマワリだと後始末大変なんです。だったら菜の花、菜種でいいんじゃないのってことで。ウクライナのチェルノブイリでの菜の花の実証実験をもとにしてました。

まだその頃って米も作っちゃいけない、野菜を作って出荷できない時に、一番安心して口に入れられるものとして油だねってことで、菜種油を作るために一般社団法人を立ち上げたんです。その頃って何もないから、助成金とか寄付とかで頂いて。一番困ったのは刈り取りなんです。手刈りだともう無理なんです、何ヘクターもあるから。そうすると、コンバインが欲しいので、コンバインを買うためにみんなからカンパして(お金を集めて)。残りを法人が借り入れする形で、あとを返して行って。それで始めた。それが最初。ちゃんと口にできるものって私も初めて知ったから、いろんなことで応援したいなって。

—そして今は、自分たちで菜種油の活動をやっておられるんですね。

小林：そうそう。色々あって、それでもやっぱり(菜の花を)やっていかなきゃいけないなと思って、自分たちで立ち上げたのが希来の杜(株式会社希来の杜。小高区片草につくった自前の菜種油搾油所を中心に、商品開発・販売などを行う)です。

希来の杜が、菜の花について最初イメージしていたような場所になればいいなとか。みんなが見てくれたり体験できたり、あとはそれを製品として売れたりする場所でありたいなと思って。それで始めたのが今です。

★友子さんに休みはあるのか

—友子さんは双葉屋旅館の女将仕事以外にも様々なことをされていて、お休みはあるのでしょうか。

小林：年末年始は休みます。29日から4日まで休ましてもらいます。

—それだけですか？

小林：今日みたいにあんまりお客さんがいない時(もある)。こないだはもう死ぬほど大変で。20人泊まって、次がまた連泊で22(人)泊まって。大変だったんです。法事が入ってて、22人のお膳作って。だから、忙しい時はがーって忙しいけど、従業員さんとずっとボランティアで来てくれた本間さんと家族、みんなのおかげで、何とか乗り切ってきてるかな。でも、最初の頃はウクライナに行くっていうと、こっからここまで休みますって、その間ボランティアの本間さんが来て対応してくれて、食事なしでも良いお客さんだけを受け入れてくれたり。「ちょっとそういうことで休みます」みたいなので休めたんだけど。コロナも、(お客さんが少なくて)いい時期だったんだけどどこにも行けないんだよね。

そういうことで、休めなくはないから、疲れたら無理しないで休む。そんなことやりながらやっています。休みはこの日ってはないですけど、休めないわけではないから大丈夫です。

—そうなんですね。ありがとうございます。

## 第5章 これから・学生へのメッセージ

### ★アーカイブ活動について①「おだかのあかり」

—友子さんは「おだかのあかり」アーカイブ・プロジェクトというアーカイブ活動をされていますが、それについて聞かせてください。

小林：何でこれを始めたかっていうのは、震災から10年たった時に、南相馬市で何かをまとめるとなかなかからなんだよね。津波のことでいいし、原発のことでいいけど、それを展示するとか知らせる場所がないじゃないですか。博物館（南相馬市博物館）はあっても、あれは野馬追（に関する展示がメイン）だから。

—ないですね。

小林：ないでしょ。南相馬市消防・防災センターはあるよ。でも、あれって地震、津波の時の防災について、震災後の10年のこととかその前の話とかはないんです。もうここ（小高）は1万人以上いなくなってるわけじゃないですか。そうすると、小高に残った人たちの記憶・記録を取っとかないと。そういうものがちゃんとないと後の世代につなげないんです。こっから離れた人たちにとってもアーカイブ活動が多分必要だと思ったんです。だから、アーカイブとして震災から10年の時にまとめようと思ったの。

—なるほど。

小林：震災から10年をまとめようと思ってやったら、震災前のことも知りたいよねって、すぎたさん（すぎた和人さん、「おだかのあかり」アーカイブ・プロジェクトの制作者の一人）となったの。どうせなら何人かにインタビューをして、震災の時、震災の前、震災後の一人一人の人生を聞きたいよねっていうことから始まったんです。

### ★アーカイブ活動について②「おれたちの伝承館」

小林：インタビューの内容を聞いてて、そのうちにそういうものを普通に見られるような展示するところが欲しいなと思ったの。冊子は読めるけど、映像とか写真とかを見る場所ないでしょ。

たまたま浪江で展示場所を探してた中筋さん（中筋純さん、2023年に小高にオープンした「おれたちの伝承館」館長）の、「もやい展」っていう美術展（東日本大震災を題材にした作品を集めた美術展）を、私も見てきたの。で、これ、都会でしか見せてなかったんだけど、この地区にあったほうがいいよな、地元でやっぱりこれ欲しいなと思って。それで中筋さんが展示場所を探してたんで、ちょうど空いてた浅野設備さんのとこの倉庫を使っていいか聞いてみたんです。そしたら「貸してもいいよ、好きなように使っていていいんだよ」って言ってくれた。中筋さんはそこを見に行ったら、ここがいいって言って。それから始まって、あの「おれたちの伝承館」ができたの。その代わり、小高の解除の日（7月12日）に合わせて伝承館を作ってた頼んだから、（準備期間が短くて）大変だったの。相馬の荒井大蔵さんも協力してくれて、実現しました。

—そうなんですね。

小林：あと、その人たちが通いながら活動できるようにするには、やっぱり泊まる場所必要じゃないですか。でも、うち（双葉屋旅館）にタダで泊まっていいよっていっちゃ、相手が遠慮してそうはできないっていうのはお互いに分かるから。じゃあってことで、たまたま近くに一軒家があったので、それを買ったんです。で、どうぞって。多い時は十何人あそこに泊まって、そこ（浅野設備さんの倉庫、現在の「おれたちの伝承館」）の改修工事をしたわけ。絵を描いたり。私もやりたかったことだから、やりやすいような場所に提供できればと思ってやりました。

だから、希来の杜もそうだけど、今の時期って見てると逆に（空き家などが）買いやすいじゃないですか。もう帰ってこない人がその家どうしようっていう時だから。昔だったらもうちょっと高かったはずなのよね。だけど、私でも買える金額で手放してくれるから、じゃあそこ買うねって。その代わりに、自分たちで直して。水回りは大丈夫だったから、あとのものはやってねって（中筋さんたちに）渡したんだけど。その代わりに年間の税金分ぐらいは払ってくれればいいかなっていう形で今進めてる。そのためにクラウドファンディングもやってるし。

—なるほど。

### ★アーカイブ活動について③小高教会幼稚園

小林：おれたちの伝承館で展示されているのは芸術じゃないですか。だけど、写真とか震災の記憶・記録を展示するところないんですよ。小高交流センターに展示ができるのかなと思ってたら、残念ながら市は何もそういうこと考えてなかったよね。ほんとはそういう場所にしてくれたらいいなと思ってたの。けど、全然市のはそういうことに何も関心がなかった。言ったんだよ、一生懸命。地域協議会（小高区地域協議会）でも。それこそ小高復興デザインセンターの、東大の窪田先生たちも一緒になって、あそここの場所どうしようって。私たちが（小高交流センターに）欲しかったのはお風呂。あと、震災の記憶の場。どちらもできなかったの。分かる？ その無念を。

じゃあ、私たちのできることでやれることないかなと思って。それで、教会幼稚園（小高教会幼稚園）あるじゃないですか。

—教会幼稚園は、震災後もそのまま残ってたんですか？

小林：そうそう。それで、今の牧師さん、飯島先生がたまたま旅館に泊まって。「教会どうするんですか」って聞いたら、「いや、分からないです。まだ決まってない」って言うから、「残せませんか」って言って。

—そこを写真とかそういうものの展示場所にするんですか？

小林：そうそう。教会も動いてくれて、今どういうふうに改装するかってのを、東大のデザインセンターのメンバーだった院生と東北大の院生の協力をいただいてやり始めてる。そこにどんなものを展示するかはこれから。関わらざるを得なくなりました。それでなくても忙しいんだけど。言ってしまったものは

やらなきゃいけないんです。頑張ります。

あそこの幼稚園は、教会が120年、幼稚園は80年の歴史がある。私はその幼稚園の16回生なんです。卒園生なんです。その記憶もちゃんとあって。この町の商店街の子どもたちって、自分も含めて結構あそこの幼稚園に行ってた。やっぱり親は、日中子どもたちの世話ができないから、幼稚園に入れるっていうのが割とここでは主流だったかな。

—そうなんですね。

小林：だから、幼稚園を残してと言った私が、やっぱり他の人に全部お任せ、じゃあねってやれないから、同窓会会長になりました。頑張るしかないんで、これからやりますと。卒園生、地域の人、大学、みんなどういふふうに残したいかってこないだも話して。あんまり変えないほうがいいと。でも、どれだけあそこ（建物が）もつのかなっていうのは思ってるんです。一番手前の120年たった教会が一番しっかりしてんだよね。雨漏りとかもしたはずなんだけど。後ろの増築した幼稚園のほうはいまいち、ちょっと立て付けとかいろんなものが悪い。

—それは友子さんが子どもの頃からあったんですか？

小林：あの教会はあった。建物自体も。

—すごいですね。

小林：そうなんです。ぜひとも見学してください。

—はい。

小林：卒園した子たちもこの間来て。あと卒園してない子たちも来てくれた。結局卒園できてないんだよね。

—震災の時の？

小林：はい。当時年中だった子たちが、「懐かしい、俺のものある」って言って見てたから。そういう思い出の場所と、歴史の場所をつくろうっていうことで動いてます。牧師さんの飯島さんの行動力のお陰です。

—いいですね。

小林：その2つですかね、今やっている大きなことは。

—それもアーカイブ活動ですね。

★「みんなの記憶にある場所を残したい」

—では、これだけは残したいっていう小高の大好きなところを教えてください。

小林：みんなの記憶にある場所。だから、駅舎の形もあのままで残したいし。中には新しくしろって考え

る人もいる。逆にこっちに戻ってきた人は、もうちょっと便利にしたいから新しい建物にしたいと思ってるけど。私たちの年代の遠くに行った人たちにとったら、まだその記憶はあるから残しててほしいってのはある。教会もそうだけど、やっぱり自分たちが育った時にあった建物、目で見れるもの、記憶にあるものを少しでも、1個でも、2個でもいいから残しててほしいってのがある。

—なるほど。

小林：そういうことかな。やっぱり話とか映像ではあるけど。現物そのものを見て、記憶としてあるものを残していくってのは、私やっぱり大事かなって。だって、映像で見たって分かんないじゃないですか。

—建物が？

小林：建物が。だから、今あるのは駅とか教会でしょう？ そういうものが一つでも残ってるだけでいいのよ。

震災前の建物が、全部ない街もあるんだよ。「あれはないよ」と思いながら。だから、これだけはっていうのはそういうこと。まだ記憶にあるとしたら、自分たちの子どもたちにもそういう記憶で語り継がれるじゃん。「おばあちゃんがここ通ったんだよ」「百年前からあるんだよ」っていう話もできるわけ。だから、そういう場所を残して、中に展示物や町の歴史を置いてくれたらいいなってことで今活動してます。

—ありがとうございます。ではこれから先、小高をこんな地域にしていきたいという目標があれば。

小林：こんな地域に。楽しく暮らせて、普通の暮らしができればいいなって。夢は、みんなでお茶飲みながらおしゃべりできる場所があったりする場所があればいいなって思ってる。そんなことかな。でも、それは皆さんに託しましょう。

—そうですね。

小林：またきつと、こんな古いもの、新しいのにしちゃったほうがいいんじゃないかね？ってなったら、そらしゃあないけど。ただ、あんまりにも町の中にソーラーが増えていくのは嫌だね。

—ソーラーパネル。

小林：うん。宅地だもん。家あったところにあんなにいっぱい置かないで、屋根の上に上げてほしいなってのはずっと言ってることかな。

—例えば国の復興政策とかって、新しいものを作ってみたいな話も多いじゃないですか。それって今の友子さんの、楽しく暮らして、時々思い出話しながら…みたいなのとは、だいぶズレがある気がするんですけども。

小林：だから、復興の意味が違うんだと思う。元の住民の思いの復興と、行政とか国の考える復興は。全部壊して新しいものにするのが復興なのか。それとも元の暮らしが少しでも残る場所としての町であればいいなって思うのか。そういうとこの違いかなって気はするのだけど。

—それはそうですね。

小林：やっぱりみんなふるさとっていうのがあるから。ここから避難した人は、もう避難先がそこが子どもたちのふるさとになるわけで。だけど、ここは私たちのふるさとだから、そのふるさとがそのままいてほしいってのが、それぞれ思うことだと思う。確かに便利になることもいいんだけど、それだけでは寂しいかなと思ってます。

### ★学生へのメッセージ

—ありがとうございます。では最後に、学生たちに伝えたいメッセージがあれば。

小林：みんな笑って生きようよ。楽しく生きよう。

—はい！

小林：楽しく生きる方法を考えよう。ハッピーになれるように。いっぱいお金要らないから。

—そうですね。

小林：お金があれば自由にいろんなことができるけど。みんなで笑い合ったり、一緒にご飯食べたりするのが私は好きだから、それができる今が一番いいかなって気はする。みんなそれぞれだけど、自分たちの目指すものに向かっていってくればいいかなって。期待しております。そんな感じですけど、よろしいでしょうか。

—はい。ありがとうございました！



## 【学生の感想】

私は南相馬出身ですが、「震災のときあの場所でこんなことがあったんだ…」と新たに知ることが多くありました。また、友子さんとの対話の中に座学の授業で学んだ内容が含まれていることや、逆に友子さんとの対話の中で知ったことが座学の授業で取り上げられたことがあり、大学内・大学外、双方の学びにより、震災・原発事故・復興について深く理解することができました。今後も大学内だけでなく大学外での学びを大事にしていきたいです。

行政政策学類 1年 遠藤愛奈

この活動を通して、今まで知らなかった震災の影響や被災地の今を知ることができました。メディアからでは得られない、避難生活や復興の実情を聞いたことは、貴重な経験だったと思います。また、友子さんの復興や伝承への思いを感じることで、語り継ぐことの大切さを学びました。歴史を残し、活気のある町をつくる地域づくりとは何か、改めて考えていきたいと思っています。

経済経営学類 1年 鳥谷部佳辰

私は、今を楽しく生きようとする友子さんの姿が印象に残っています。インタビューの中で、今の小高は「不自由なりの良さがある」と言っていて、生活を便利にすることが全てではないのだと私は気付かされました。また「知る」ことで、分かることや自分に出来るが増えると感じたので、このアーカイブ化したものを読んで、震災・原発事故のこと、小高のことを知ってくれる人が増えたら良いなと思います。

経済経営学類 1年 加倉井美海

「むらの大学」の活動を通して、実際に現地の方々のお話を聞き、人柄に触れて、たくさんの元気をもらえました。一度ゼロになってしまった故郷を、友子さんを始めとしたたくさんの方々が、それぞれのやり方で復興に向けて活動している小高区は、本当に素敵な街だと思います。インタビューの原稿整理も初めての経験で悩むことも多かったのですが、先生や友達の支えがあってやり切ることができました。総じて、本当に貴重な経験でした。

食農学類 1年 宍戸滉太